早稲田商学第317号
昭和61年7月

世界経済の歴史的風土論的研究について

——加藤義喜著『風土と世界経済』に寄せて——

町田　実

1.　従来われわれが国際経済問題を考え，世界経済を分析するといった場合，その視点をどこに置くか，その対象は何かというと必らずしも明確に定っていたとはいい難い。

古典派経済学の体系を見ても，それは「ホモ・エコノミクス」を前提とし，全商業世界を一つとして展開された経済的合理主義の体系であり，そこにあるのは自然調和の世界観であり，資本の織りなす市場経済の論理であった。その背景にはギリシャ以来の自然法思想が一貫して流れていると見られるが，それはデカルト以後の西欧近代の合理主義に裏打ちされ経験論的体系をつくりあげていったのである。対象としての世界は自国の延長でしかなく，そこにあるのは同質の世界であり，異質の世界は考慮されてなかったから，経済の論理はその限りにおいて普遍的なものでなければならなかった。

ドイツを基盤として展開された歴史学派の思想は，「国」「民族」を経済の主体として意義づけ，スミス的経済観を抽象的な「万民経済学」であるとして批判した。F・リストのように，諸民族経済を世界経済を構成する経済的主体として位置づけ，競争の平等という立場を基本的には認めるのだが，現実にある差異は経済発展の量的な程度の問題としたのである。経済の基礎をなすのは，個人であり，企業主であることは，古典派経済学と同じであり，その背景にあったのは，イギリスとドイツの違いはあっても同じ文化的基盤に立つ西欧的社

会のそれであった。したがって，リストにあっては，熱帯地方の経済についても，触れなかったわけではないが，その風土は文明に適さないものとされ，問題の埒外におかれた。

2. 20世紀に入ると交通・通信の長足の進歩により，世界の諸国が距離的に近接化し，経済の国際的活動が頻繁化するにいった。国民経済の問題もさることながら世界経済的連関を意識しての問題が増大した。西欧諸国とくにドイツでは各所に世界経済研究の機関が設立され膨大な資料が作成されるようになった。代表的な世界経済学の論者として，シルダー，ワルテルスハウゼン，ハルムスといった名をあげることが出来る。日本ではいち早く作田荘一，生島広治郎といった人たちがこれを継承あるいは発展させ研究にあたっていた。

ここでは，これらの論者たちについて，これを論評しようというのではなく，ただ今日の問題とどのように違うかを見たいだけに過ぎない。たとえば，「国民経済および世界経済」の大著で有名なハルムスの「世界経済」あるいは「世界経済学」の概念を一瞥してみることにしよう。(1)

ハルムスはまず「きわめて発達せる交通機関によって可能となり，国家間の国際条約によって秩序づけられ，かつ促進される地球上の各個経済間の関係および相互作用の総和」を「世界経済」と考えるわけだが，もちろん有機的統合体としての「世界経済」を把えようというのではない。いわば，それは交通・通信機関を媒体として相互関連の深くなった世界的規模の経済関係を問題としているに過ぎない。内容的には「世界経済は世界市場を通じて各国の企業と家政とが間接的に相互に結合せる市場経済である」ともいえるもので，そこには，各国毎の経済の質的差異はとくに問題ではない。

したがって経済の実体が自由貿易に基づくものであることに変りはない。国民経済も世界経済もその出発点は人間の欲望の充足にあるとする点でも何ら変りはないのである。

この点，マルクス経済理論にしても同根だが，ただ，そこでは欲望の充足から市場経済に入るのではなく，生産の実体を踏まえた分析から入り，経済構造の全体を解明しようというのであり，世界経済は世界的規模に拡大した交換関係とその背景にある生産関係の体系ともいうべきものととされる。それは世界経済というより世界市場であり，その限りとして市場は一つと考えられ，資本主義も社会主義もないからである。しかし，現実には単なる市場としてではなく，資本主義世界経済であるか社会主義世界経済であるか，あるいは全世界経済として包括さるべきものとされる。

マルクスは一見，生産方法の発展を指標とした単純な直線的発展説をとっているかの如くいわれているが，必らずしもそうではなく，複数の内部発展的系列を前提とし，それぞれの系列のうちで，同時代の人類の生産力の発展段階を代表するような先進的社会構成をとってアジア的，古代的，封建的，近代ブルジョア的と規定したものと思われる。[2] ただ，農業社会に属するアジア的，古代的，封建的という発展段階にしても，それはユーラシア西部地域における特有な発展段階であって必らずしも人類史の普遍発展段階とはみとめがたく，マルクスにおける西欧的偏見が，そこにも見出すことが出来るようだ。

マルクス史観に限らず，従来西欧の伝統とする科学的理論構成には，その背景にキリスト教的倫理観があって，その思想的優位性が前提とされる傾向があるともいわれる。それがときに進歩的優越感となって現われ，また逆に退廃的終末思想となる。

西欧優先の思想は，時に「一視同仁的コスモポリタン的見解」となって，一見公平無私な科学的態度」とされ，長年にわたり西欧化がそのまま近代化と受取られてきたことも否めない。

ともかく，西欧的伝統の中では，世界経済の取扱いは，原理を重視すればその異質性は除去され，同質化への方向において論理的構築を行ってきた。「原理的展開における異質性の除去と，実証研究における異質性の重視という，理

論研究における奇妙な乖離現象をわれわれは経験している。」[3] これは世界経済の理論研究における一つの悩みなのである。

そこで，加藤義喜著『風土と世界経済』の登場を願うわけだが，「世界経済は西欧で育った経済学が仮定するように単純に同質的ではなく，むしろ異質的であり，それには，それぞれの地域，国および地方の歴史的風土的な背景の相違が大きく関っている経済政策も，こうした異質性に十分な配慮をして行わるべきであり，国際経済秩序はそのような政策的対応の自由を許容するように形成されなければならない。」[4] と著者は語り，未だに「世界経済を本来的に無国境的な同質化への一方的傾向をもったものと考える西欧的偏見と科学的たらんとする経済科学そのものの偏向がある現状からして」[5] 世界経済の研究を地域，国および地方についての学際研究により，時間的歴史的研究ならびに空間的風土的研究の両者を重視した融合的立場が必要とされるのではないかというのである。

3. ここにとりあげた加藤義喜著「風土と世界経済」は，A 5 版約 400 ページにおよび意欲的な大著であるが，全体の構成は次の 8 章からなっている。

第 1 章　世界経済の風土論把握

第 2 章　風土論の気候学を中心とする自然環境論的基礎

第 3 章　二次風土（第一次産業の態様）の社会経済的影響

第 4 章　東南アジア経済の風土論的分析

第 5 章　風土と日本および日本的発展原理

第 6 章　風土と共同体

第 7 章　風土と国際経済秩序

第 8 章　経済発展と風土

一見してわかる通り，純粋な理論的研究の成果とは異なるものがある。著者自ら本書の構成と意図について述べているように，「経済社会の発展を歴史的

時間軸と風土的空間軸の両軸の交叉として捉えるが，風土的空間については自然的風土空間としての一次風土と第一次産業の態様としての二次風土と重層的な形で把握するという工夫をし，……この総合的アプローチにより各々の国民経済や地域地方の経済をそれぞれの特徴においてつかむことを心掛けるとともに，そのことの意義を国際経済秩序あるいは広く国際秩序のあり方や経済開発との関連において考えてみたい」[6] という壮大な意図によるのである。

第1章と第2章は，世界経済の風土論的分析の方法論的導入部であり，基礎的問題が論じられている。主として一次風土の問題の理解にあてられる。

第3章では，農業を中心とする第一次産業の態様である二次風土についてウィットフォーゲルの研究その他の紹介とその検討がなされ，最後に飯沼二郎の「風土と農法」に関する世界史的仮説に及んでいる。

最初の3章はいわば風土論的研究のための基礎的な分析で約170ページをさき，第4章と第5章にその東南アジアと日本についてのケース・タディとなっており，約100ページをさいている。

つづいて，第6章では国民経済を特徴づけているその制度的要因と関連して重要と思われる共同体のあり方を取りあげる。F．テニエスの「共同社会」(Gemeinschaft) と「利益社会」(Gesellschaft) という概念の重要さを指摘するとともに，イギリス的経験主義の流れを追い，スミスにみる自由主義，個人主義に触れ，さらにホッブスやハイエクにも関連させ，プロテスタンチズムを背景とする西欧的社会システムの理解に及んでいる。そして第2節以下共同体と生物学的アナロジーとしてダーウィニズムやゲルマン的共同体と風土との関係を論じ西欧的システムの危機にまで及んでいる。最終的には「日本的風土と共同体」によって著者の積極的見解が示される。

第7章では現局面の問題として西ヨーロッパという相互依存性の強まっている現代世界経済を象徴する地域をとりあげ，国際経済秩序のあり方を分析し，経済的政治的統合を進めながらも各国各地域の特殊性を残している実情とその

論理について述べ「世界経済秩序」のあり様にも説き及んでいる。

最後の第8章は，経済発展の格差をもたらす本質的要因について風土的要因を含めて論じ，後進諸国の国づくりや経済開発には各国の国民性や社会システムの差を考慮すべきことがいかに重要であるかを強調する。

以上簡単に要約したが，その内容は文字通り多岐にわたり，まさに学際的研究にふさわしいものとなっており，その全容を正しく紹介し，論評することはまさに難事である。

4. つぎに，著者のいう世界経済の風土論的研究の意図あるいは課題ともいうべきものについて少しく考えてみたい。

風土論といえば，約半世紀も前になるが，和辻哲郎「風土」を手にした頃の感懐を思い出す。和辻の「風土」の発想は，昭和のはじめ氏がヨーロッパに留学したとき，同行した大槻京大助教授の「ヨーロッパには雑草がない」という話を聞き啓示に近い驚きを経験し，ベルリンのハイデッガーの哲学に影響を受けて，風土と離れた歴史もなければ歴史と離れた風土もないという理解となって成熟したものといわれている。[7]『風土』は和辻にとって人間学的体系の重要な基礎をなすユニークな著作で，今なお清新さを失っていない。

和辻は風土学の由来をヘルデルから説きおこし，ヘーゲル，マルクスへと及んでいるが，マルクスの唯物弁証法からする歴史解釈における国家に対して「土地，気候，種族等の特定の自然基底の上に歴史的伝象，言語，性格の特徴などを同じくしつつ，歴史的，社会的発展過程によって生じた大衆形成体である。」と規定し，物質的生産過程を一応重視して，人間と自然との共働としての自然を認めることから発しているとしながら，生産の仕方の進歩，とくに資本主義的生産が出現すると，どこでもそれは同質化し，地方的限局はほとんどなくなるかというと，そうではなく，物質的生産過程における風土的規定は決して弱まってはいない」，[8] と述べている。そして「風土的規定は人間存在の構

造に属するがゆえにまた人間存在の全面にわたって働いている。」[9] と人間学的立場からマルクス理論に批判的であった。

和辻のこうした立場に対しては，戸坂潤をはじめいくつかの批判が見られるが，イデオロギー的側面については，たしかに問題はあるにしても高島善哉のようにマルクス経済学の立場からも，それが十分メリットあるものとして汲みとるに値すると評価する論者もいる。

要するに，和辻の場合，風土はあくまで自然そのものというよりは歴史的文化的なものであって，人間の経済的側面，特に生産の場があまり顧慮されることなく，いわば，気候，自然環境のもたらす社会制度や人間関係への影響に向けられた『天才的な芸術的直観』[10] とも呼ばるべきものであった。

さて「風土と世界経済」の著者は，和辻の風土論が国民の個性尊重という規範的な面からその人間的論理学の体系に結びつく論理であることを高く評価し，家族，地縁共同体，国家共同体という関係を重視してその延長線上に世界秩序を考えるわけである。著者は，西欧における風土論の系譜とその後の流れをフォローするとともに，戦後わが国において新たなる問題提起をした梅棹忠夫の生態史的研究を評価し，いわゆる京都学派の風土論的観点からする一連の研究成果について，その基本的枠組において親近感のある立場を表明している。[11] ここに著者の全体的枠組とともに特殊性を重視するといういわば複眼的な永年調査で培ってきた鋭い計算がある。

5.　第二次大戦後，世界はアメリカを中心に先進国間の相互依存性を強め，高度な経済成長を実現してきたが，他方では後進的な周辺諸国の立場からは，従属論や社会疎外論からの批判を呼び起している。たしかに，アメリカを先導とする「高度成長経済の推進は，生産構造の高度化・多角化，消費構造の高級化，多様化を実現し，外国貿易の内国化，内国貿易の外国化という同質化・融合化を進めてきたことも事実である。」しかし，他方「生産と資本の国際化」

が進展し個別資本の自由化が著しく前進すると「国という単位のもつ意味」[12]が改めて問われている。

この問題について，ここで詳細に論ずる余裕はないが，現在の世界経済・国際経済を考えるとき，その混迷と複雑化の原点がそこにあることを思えば，著者のその取扱い方と意図がどこにあるかを見ておくことは，全編を理解するのに大変重要なことと思われる。著者は，現代の世界経済は，先進国中心とはいえ相互依存性の深まりによって先進国間の基本的敵対関係が解消したことの重要性を指摘し，技術革新，交通運輸手段の飛躍的発達が国際間の物理的な壁と距離を大幅に低め，そして縮めるという劃期的な変化を齎したことは認めるけれども，その典型ともいえるＥＣにおいてさえ現実にはなお経済的不調和と政治的紛争が絶えないことをあげ，「もともとヨーロッパは同質的にして，しかも異質的な地域」[13]であることを認識しなければならないと強調する。著者によれば「西ヨーロッパでは，西ヨーロッパ大のリージョナリズム，一国ベースのナショナリズムと，それに国内のローカリズムの三段階での秩序が考えられる」[14]というのである。西欧世界においては，同質化の傾向があり，国境が相対的であるとしても「異質性は決して容易に解消せず，またそのこと（異質性の解消）が望ましいわけでもない」[15]と考える。ここに著者の現実主義的解釈を見ることが出来る。

しかし，現実には多国籍企業の出現とそのグローバルな活躍にみるように，国境の存在を希薄化させる傾向がますます強く，他方では，国家の存在は，国際的な貿易関係を複雑化し，貿易摩擦をひきおこすという矛盾した現象が生じていることも事実である。国際間において企業活動と資本の自由な活動が保証されているとすれば，どこえ輸出し，どこから輸入しようと自由な筈だが，現実には結果的に国単位の決済となり，収支となっていずれか一方の国に累積することになるため，それが貿易摩擦あるいは経済摩擦となり国際政治経済の課題となっている。要するに，Ａ国の輸出が，実際にはＡ国へ進出したＢ国資本

出による製品であろうと，A国土着資本の製品であろうと関係なくA国からの輸であり，その輸出超過が累積すれば貿易摩擦となってしまうということである。A国へ進出したB国資本はB国に帰って貰えば，出超も入超もなく，問題はなくなるかも知れないが，企業と資本の自由が基本となっている国際社会では現実には無意味な提言であろう。[16]

無差別自由な貿易関係を謳い文句に出発した戦後の世界経済も，いくたの矛盾をはらみつつあるが，この多国籍企業の出現によるこうした矛盾をいかに調整すべきかは，国の特殊性を尊重する立場からは如何に対処すべきであろうか。直接風土論と関連する問題でないかもしれないが，ナショナルなものとインタナショナルなものとの関係をどう調整すべきかは，世界政治経済の重要課題であるに違いない。

6.　さて，著者は，かつて『後進国の貿易と開発』[17] を書いて後進国問題に独自の分析と提言をされたのであるが，『風土と世界経済』は，まさに，そのバックボンを示すものとも見られ，ゆるぎない体系化の試みとしても高く評価さるべきであろう。しかし，著者の担う体系は何も一元論的な統一原理などという大げさなものではなく，もつと地道なしかも学際的スケールの個別研究による真実の追求であり，具体的には政策的対応なのである。しかし，そのためにはまず一里塚を築いたといったところかも知れない。

かつて，人文地理学の体系化を行ったヴィダル ドゥ ラ ブラーシュが，彼の学際的な研究について批判があったとき，次のように述べているという。

「自然において諸現象は互いに複雑に交錯しているのに諸事象の研究に着手するにはただ一つの行き方しかないというはずはない。これら諸事象が異なった角度から考察されることは有益である。そしてたとい地理学が他所のマークのついたある種の資料をとり上げて利用しているとしても，この点について反科学的だととがめらるべきいわれは少しもない。」[18] と。

このことは現在なお世界経済の科学的研究についても言いうることであろう。

現在の科学は，つぎつぎと部門が細分化され，その分析はその極限にまで達しており，問題の隅々にまで行きわたる研究を行うといっても一人の人間の能力を超えるものがある。しかし，他面，現代ほど複雑化した問題について，その総合化なり学際化による真実の把握が必要とされる時代はない。このことは，あらゆる分野についていえることで，細分化が不要だというのではないが，やや行き過ぎるとことの本来転倒となりかねない。一つの現象を正しく把えるためには，あらゆる側面からのアプローチが必要とされるが，要はその全体像をどう把握するかであろう。とくに人文諸科学，社会諸科学の場合その必要性が強調される。

ここに取り上げた諸論点は，このところ私が直接に研究対象としているところではないが，若い頃から少しく関心をもっていたところなので，ときに見当違いのところがあるであろうことを憚らず，著者の研究心と熱情に触発されるままに一言した次第である。著者ならびに読者の寛恕を乞いたい。

注(1) 生島広治郎「世界経済学著作選集第 1 巻」p. 63, p. 181. その他については省略する。

(2) 上山春平「歴史と価値」p. 140.

(3) 「実際われわれは，世界経済の舞台に登場する様ざまの現象について過去の経験的知識から何らかの因果関係を摘出してきた。ところが原理としての世界経済論の建造物を見るかぎり，そこには異質と思える要素は容赦なく切捨てられているが，原理の修正的説明の事例としてしか与えられていない姿を見出す。あるいは，異質性を重視する立場から，世界経済論そのものの原理的展開を拒否する姿勢をも見出す。ところが他方におい，実証分析の成果は，今日の後進諸国に累されている貧困が資本主義の生み出した世界経済の分極化の必然的帰結であることを明らかにして，後進国の異質性の必然性を重視しているのである。」「本山美彦「世界経済における複合性把握について」

(4) 加藤義喜「風土と世界経済」p. 42.

(5) 同上 p. 4.

(6) 同上「まえがき」を参照されたい。

(7) 和辻哲郎『風土』戦後版，p. 243. 以下谷川徹三の解説参照。

(8) 同上 p. 233～234. 和辻は当時のマルクス主義の流行を意識して書いたと自ら語っている。

(9) 同上 p. 235.

(10) 岩波講座「日本歴史」24別巻1（岩波書店1977）井上光貞「日本文化論と日本史研究」

(11) 加藤前掲書 p. 26～p. 29.

(12) 同上 p. 336～

(13) 同上 p. 337.

(14) 同上 p. 339.

(15) 同上 p. 341.

(16) この問題に関しては，大前研一『世界から見える，日本が見える』p. 50～
大前氏は基本的には日米間に「不均衡」は存在しない，と主張している。

(17) 昭和44年，世界経済調査会発行，この書物は，世界経済調査会理事長，木内信胤によれば「世界貿易の現状の研究」としてスタートしたもので「世界貿易の研究―その一，後進国の部」と名付け然るべきものとされ，堅実な研究態度が高く評価された。

(18) フェーヴル著飯塚浩二訳『大地と人類の進化』――歴史への地理学的序論――（岩波文庫本上巻 p. 58.）